

当報告の内容は、報告者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「参照文法書研究」（2016 年度第 1 回 [通算第 1 回] 研究会）

Title: Studies on Reference Grammars (1st meeting)

日時：2016 年 7 月 24 日

Date: July 24, 2016 (Sun.)

場所：AA 研マルチメディアセミナー室（306）

Venue: Room 306, ILCAA

主催：基幹研究「多言語多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」（LingDy3）

Organized by Linguistic Dynamics Science (LingDy3)

## 1. 渡辺己（AA 研所員）

「趣旨説明と参照文法書について」

まず、本共同利用・共同研究課題の代表者である渡辺己から、本課題の趣旨説明として、参加メンバーの紹介、本課題立案の動機、各メンバーに報告してもらいたい内容、予定する成果物について、それぞれ説明をおこなった。その後、参照文法書について、本研究会のなかで報告をしてもらう際の指針になるように、備えるべき特徴やありうる問題について報告した。特に着目点としてあげたのは以下のものである。

1. 可読性・利便性・網羅性（読みやすく、知りたい情報へのアクセスが容易でありつつ、網羅的でなくてはいけない。）
2. 例文（その選択、グロスの付け方などが適切か。）
3. 説明・分析の正当性・根拠（なぜそのような分析をしているか説明が求められる。）
4. 学習用的文法書・百科事典的文法書（前者のように前から順に読めるものと、後者のようにすべてを盛り込んでいるもののバランスをいかにとるか。）
5. 類型的観点（筆者に、類型論の知識や、他の言語の知識があるかどうかで、書かれた文法書が非専門家に分かりやすいものになるかが変わるのではないか。）

## 2. 山越康裕（AA 研所員）

「モンゴル語族の文法書」

本報告では、モンゴル語族に含まれる言語・方言に関する記述文法・参照文法書を概括的に紹介したうえで、それら文法書の記述における問題点を報告した。

とくに 20 世紀までのモンゴル諸語の文法書に関しては、全般に次のような傾向があることを指摘した。1) ロシアにおける文法の枠組（たとえば動詞の屈折体系を定動詞・形動詞・副動詞と分類するなど）で記述されているものが多い。2) 表記が音声表記か音素表記なのか

が判然としない文法書がある。3) (モンゴル語以外の) モンゴル諸語に関する文法書の多くがモンゴル語を理解していることを前提に、モンゴル語との比較対照をしつつ文法を記述している。4) おなじくモンゴル語を理解していることを前提としているためか、グロスが省略されている文法書が多い。5) 形態論が充実しているのに対して統語論の記述が簡略な傾向がある。6) 形態論に関しては自立語・付属語・付属形式の別を十分に検討していない文法書が多い。

その後の質疑においては、モンゴル語の理解を前提としている・音素表記かどうか判然としない文法書があるという点に関しては、モンゴル文字という文字を有していることが弊害となっている可能性があることが指摘された。また、ロシアの文法記述の枠組が適用される以前の文法書がどのような構成であったのか、といった質問があった。

### 3. 児倉徳和 (AA 研所員)

#### 「ツングース語族の文法書」

本発表ではツングース語族の既刊の記述文法書を満洲語・シベ語を中心に紹介した後、これらの文法書の記述の問題点をまとめて報告した。本発表で述べたツングース語族の文法記述の問題は以下の2点にまとめられる。

1. 満洲語は文法記述の歴史的経緯から、他のツングース諸語の記述と枠組みが分断され、最近の研究に至るまでツングース諸語全体における動詞形態論の歴史的変化が追いついていない。
2. 個別言語の記述では、音韻論・形態論・統語論のうち特に統語論の記述がほとんどないことから、語を越えるレベルでのプロソディの記述や、モダリティ、情報構造など語と文のレベルにまたがって現れる文法現象の記述が体系的でない。

質疑では発表に関連して、プロソディに関連した非文の記述の困難さ、共時的に例外であるか否かをどのように認めるか、情報構造の記述に関して「焦点」という用語・概念の問題、記述の体系性と各論の可読性のバランスの問題などが議論された。